

うけていた。
昭和三十五年の暮れ、三池闘争が終結して職場復帰が行われたが、三池組にとどまった伝造さんは、たちまち坑内通気工に進み出されてしまった。
伝造さんにとっては、はじめての坑内労働であり、昭和三十六年一月には、きつり腰でたちまち休むという事になった。

同、四回手術をうけてやっと恒子さんが健康を回復したのには、昭和三十四年になってからであつた。
退院と同時に新築に住宅をもち、移り住んだが、それでもはじめての三池組の坑内労働の生活がはじまったのだ。

ていた。
ド、ド、ドと震る地盤をのぞくようなひびきが生じる真下から、すり上げるようにひびいてきた。恵一君が「おかしか、お母さん」といふかき声を顔をおけた。
そこに次男の功君が飛び込んできて、「お母さん来て、お母さん来て、三川組の方で上りより、あれが原山雲ちうけなさい」といふたが、恒子さんは妙に体が



夫の遺影を抱けたころの姿が目に

されたというので、つまり生きて収容されたと思ひこんでいた恒子さんは、「生命だけはあつてよかった」というので、その奥さんそれ以上いへない。伝造さんが三百メートル坑道ですでに息絶えてたというのでは早く確認されてたが、だれも恒子さんに知らせることができなかった。
「はよ来い、間に合はんよ」

体をのせた台車が処置室に入っていくので、いっしょに入ろうとして、白衣の人が手をひらけて立ち去る。
「家族の人はいらないで下さい」といふので、バタンと大きな音を立てて扉を閉めた。
トランクの運搬台に、ついでと処置室の入口には、ひかれた遺体は、部屋つきの部屋の中で洗われ、ならべられた

の方をわけていこうと思つて、たつた心で体育館まで連れていって来た。
「おかげで私は天領病院から主人の横についてやる事ができました。中には体育館で百以上お棺をあげて探した人もいたのに、それくらべはいくらかでも心が安らいます」と恒子さんは語った。

福岡県 福岡市 秋葉園 評では、秋葉園から明年の選挙にかけて、労災災害、職業病、職員の間の関係、体制強化とあわせ各フロアごとに、反合理化討論集会を開くことになった。そのうち、秋葉園は、きたる十日大牟田市労働会館で、この討論集会を開くことになったが、この集会には、大牟田市各団体の積極的参加と協力が強く求められている。集会は、日の午前十時から、場所は労働会館。



怒りの別れ

「とうちゃん、苦しかつたね。きつと、かたきはうつからね」今はつめたくなつてしまつた夫の、父の、息子の遺体にとりすがつて呼びかけた言葉だつた。
あれから五年。今三井独占資本はますます生産を独占し、米え、そして労働者にあくなき攻撃を加えている。どうして、このままのさばらせておくのか。どうしてこの三井を死者が許すのか。

(写真下は、犠牲者に最後の別れ。右は、ズラリと体育館にならんだ棺)



恵一君も結核にたおれる

冷たい会社にも怒り



楽しい団らんも今は夢

月々七千円の待機手当
長い闘病生活を耐えぬいた恒子さんは、人一倍明るい奥さんだつた。
それでも普通の人の三分の一以下の肺活量は、海から吹く風に逆らつて歩くことも、骨が折れるくらいに体力がなくなつてしまつた。
伝造さんがいたから、中村さん一家の生活は支えられてきたが、この突然の死は一家を暗雲のどん底におとしこんでしまつた。
恒子さんと二人の子とに、つては生きていく上での支えを失つたばかりでなく、たちまち生活の苦しさが一層のみに襲いかかつてきた。

遺族対策として作られた工場の工場は、恒子さんにとっては体力をはかるに上まるものであつた。会社が毎月七千円づつ出形ばかりの「待機手当」と、合計百七十四円しかなかった伝造さんの退職金、労災補償金、弔慰金の引き出しが毎月の生活費になつてきた。

突然の発病
そんな生活の中でも大牟田商業に進学した長男の恵一君は、テニスの選手として活躍し、体も心もたくましく成長していった。大牟田商業の夢をもつていた次男の功君も、恵一君と同じ商業高校に入学して、

三ヶ月間といわれた療養もあり、思ひくなく、すでに銀水園生活一年がすぎようとしていた。
遺族として生きつづける。
病弱な恒子さんは、いまでも必ず遺族会の会議には出席することにしている。
伝造さんの死によって突然変つてしまつた親子三人の生活の心の支えとして、伝造さんを殺した者への怒りが、油そうとして燃ええなからである。今年一月の会社

沖繩三大選火ぶた切る 祖国復帰かけて

【KNA】沖繩県初の琉球政府主席(知事)選挙と第八回立法院議員選挙は十月二十一日告示され、十一月十日の投票日をめざし選挙戦の火ぶたを切った。
主席選挙には野党(社大、社会人民)と労働組合、民主団体で構成する革新共同会議の屋良朝宙(やら・ちやうひづ)統一候補、沖繩県民党の西銘順治(にしめ・じゆんじ)候補、保守系無所属の野原隆彦(のの・たけひこ)候補が立候補した。
今回の選挙は、十二月一日に行なわれる那覇市長選挙(十一月十六日告示)とともに「三大選挙」といわれ、沖繩県の祖国復帰の行くえを見きわめ、七〇年の安保再検討、期の前しう戦としての選挙をもっている。